

景観フォーラム 11号

日本景観フォーラム会報 11号 (2013年10月1日)

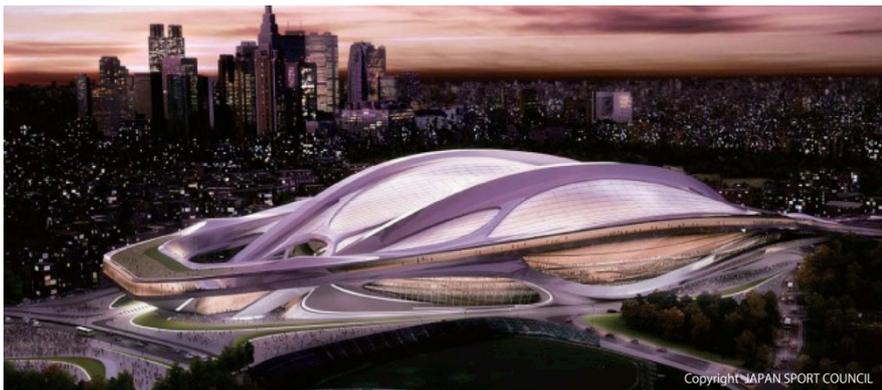
<巻頭言>

2020年のオリンピック開催地が東京に決定されました。喜ばしいことです。世紀の祭典であるオリンピックは人類のイベントとして最大かつ最高のものであるでしょう。最大とはその集客ならびに経済的効果という量的なことにおいて、そして最高とは平和が齎す人類賛歌と感動という質的な面においてであることは言うまでもありません。平和の祭典であるこのオリンピック開催中には世界の紛争や戦争は即刻やめてもらいたく思います。



1964年の東京オリンピックをご記憶な方も多いと思いますが、その開催に合わせ日本の高度成長経済は絶好調に突入しておりました。その時点においては、景観問題は全く議論されず、日本橋の真上には“素晴らしい”高速道路が架せられました。そしてまた、オリンピックという名の下に、明治時代の教養人が残した明治神宮の外苑周辺の風致地区が破壊されようとしております。

著名な建築家である槇文彦さんの新国立競技場建設に対する苦言は、国民的運動に広めるべきであり、むしろ競技場の名を国立から“国民”競技場と名を改め、より多くの国民が参加する場を考えては如何でしょうか。槇氏の論文は下記のwebサイトのとおりで。 (齊藤全彦)



<http://kenplatz.nikkeibp.co.jp/article/building/news/20130912/632051/?P=1&rt=nocnt>

特定非営利活動法人 日本景観フォーラム

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町14-5-502 TEL

03-3780-3814 FAX 03-6379-6681 E-mail

info@keikan-forum.com

URL: <http://keikan-forum.com/>

VOICE

○旅から学ぶ景観まちづくり・・・・・・・・・・・・・・・・山口 遼 (松蔭大学4年)

ちょっと放浪癖がある大学4年生、山口遼です。
国内外問わず、ふらっと一人旅に出ます。ここ数年は海外中心に旅をし、様々な文化や伝統、そこに現れる景観と人々とのふれあいなど、日本では感じることのできない体験をしています。国内の旅では伝統文化をテーマに旅をし、地域の良さ、人々の暮らしに触れて、景観まちづくりを探究しております。

ところで、あまりにも旅好きなので、活動や旅をする時は、「山口 旅生 (YAMAGUCHI RYO)」という名前で活動しています。

大学では、観光学部に所属し、選考は、観光による地域振興です。国内の様々な地域に足を運び、ボランティアやイベント、NPOなどを通して、まちづくりの勉強をしています。



「歴史と景観＜その土地の記憶＞ーリトアニア・ポーランド行」

NPO法人日本景観フォーラム 理事
湘南学園中学高等学校教諭 吉川謙太郎

今夏、7泊9日の日程で、リトアニアとポーランドを訪れる機会を得た。

「景観」に関して、印象に残った場について紹介したい。

十字架の丘

一つめは、「十字架の丘」である。これは、リトアニアのシャウレイという都市の郊外にある場で、文字通り、大小無数の十字架で覆われた小高い丘である。

丘に誰かが葬られているわけではない。ロシア・ソ連の圧制により命を落としたり、シベリアへ流刑にされた人々を悼んで、自然と人々がここに十字架を持ち寄るようになったとのことである。これに対し、ソ連はブルドーザーで十字架を撤去するなどしたそうだが、撤去されるたびに、また新たな十字架が秘かに立てられたとのことである。

ここは、リトアニアの人々の篤い信仰心や、抑圧に対する無言の抵抗などを通して、彼らがおかれた困難な歴史的状況を象徴する場といえるのではないか。「その土地の記憶」という意味での景観として、それが極めて直接的に可視化されたものではないかと思った。



二つ目は、ポーランドにある「アウシュビッツ強制収容所」である。いうまでもなく、ナチスによるホロコーストを象徴する場である。アウシュビッツ第一収容所から少し離れた第二収容所（ビルケナウ）では、広大な敷地内にレンガ作りの収容棟や暖炉跡が整然と並ぶ。仮に、ここで何が行われたかを知らなかったとすれば、一種の秩序ある空間であるとすら感じられるかもしれない。

ある棟に収容者用のトイレがあった。トイレといっても穴が並んでいるだけのもの（写真を撮る気にはならず）。ここが、人間の尊厳を徹底的に踏みにじった場所であることが実感として迫ってきた。



強烈な「その土地の記憶」があるにもかかわらず、現地では景観について意識することはなかった。「その土地の記憶」があまりに強烈すぎるから麻痺したのかもしれない。そのような場が、ずっと同じ状態で保存すべきだという気を起させる“歴史的な遺産”になるということなのであろうか。

「同じ過ちを繰り返してはいけない」といういわば予定された感情に加え、時間が経つにつれて「歴史と景観」などということを考える材料にもなるのかなという思いも出てきている。

アウシュビッツ強制収容所

チャールストン（米国サウスカロライナ州）

NPO法人日本景観フォーラム 監事
(株) グローバル研修企画 代表 小林 均

チャールストンは1670年、イギリスからの移民によって、北米における最南端の入植地として建設された。この地はクーパー川とアシュレイ川の合流する半島になっており、海運と都市防衛の要衝の地であった。最盛期は特に奴隷貿易で栄えたが、1861年からの南北戦争では、南軍の中心的都市として壊滅的な打撃を受け、その後は人々から忘れられた存在となった。



しかし、第一次世界大戦後、亜熱帯地方の自然環境と多種多様な文化そして美しい街並みが心の傷を癒すものとして評価されるようになり、多くのアメリカ人が訪れる人気の都市として復活した。同時にその時代には、多くの歴史的建築物を取り壊し、新しい建築物に建て替える動きも活発であったが、それに対しては市民が「歴史ある建物を保存する会」をつくり、私財をなげうって歴史的建築物と美しい街並みを守ったとされている。その精神が現在まで受け継がれ、全米の訪れてみたい都市のベスト5に入る人気の都市となっている。



チャールストンの街並みの特徴として、シングルハウスによる街並みがある。シングルハウスにはピアザと呼ばれるリビングポーチが設けられ、ピアザの前庭には芝生の空間と高木が植えられており、亜熱帯の雰囲気醸し出す重要な要素となっている。住宅は半地下形式のものが多く、2階建、3階建てがほとんどで、街並み全体としてはほぼ同程度の高さとなっている。

チャールストンの住民と行政は、町にとってのヒューマンスケールの重要性を認識している。大型車輛の中心市街地への進入禁止、旧市街地全域にわたり4階を超える建築物の建築を制限、玉石やレンガ舗装で作られ花で飾られた並木道の維持修復等が行われている。各住宅の外壁、ドア、窓、鎧戸、バルコニーなどの色彩は一軒一軒美しくコーディネートされており、かつ街並みとしての調和が図られている。また、新しく建築された建物も、建築様式、高さなど、街並みと調和したものになっている。

観光リゾートの需要を当て込んで、多くのホテルやリゾート開発資本がチャールストンに進出しているが、これらは歴史的な中心市街地に立ち入ることはできない。私が訪れた時に宿泊したホテルも、外観からはホテルと分からないほど歴史的街並みに溶け込んでいた。チャールストン市民と行政が一体となった不断努力が、美しい街並みを維持でき、かつ経済的にも高いレベルを保てることにつながっていると思われる。



『人口減少社会という希望ーコミュニティ経済と地球倫理』

広井良典著 朝日新聞出版 2013 年刊



近現代において成熟社会を経験したヨーロッパ社会は、フランス経済哲学者セルジュ・ラトゥーシュの著書『経済成長なき社会発展は可能か?』ならびに『<脱成長>は世界を変えられるか?』(作品社刊)が問いかける問題を真剣に考える社会になっている。そして、日本においても人口減少が始まっている現代において、まさに同じ問いかけに真剣にとりかかる時期に来てはいないだろうか。これは、量ではなく質を問題にする QOL(Quality of Life)を社会問題の中心に据えることでもある。

さて、日本の総人口の長期的トレンドは 2100 年ころには 5000 万人弱になっているという。これは 20 世紀初頭の人口に戻るということではあるが、高齢化率が 40%を超えてしまうという点が全く異なる状況である。確かに単純に考えるならば、人口減少社会はビジネスチャンスという観点からはかなりマイナーな印象を与えざるを得ない

だろう。グローバル経済はより安価な生産箇所を探し、より高価に売れる場所を確保するという点から考えても、グローバル企業のマーケットとしては魅力のないものとなろう。しかし、国を超えて人類文明の不可逆的変遷がもたらす歴史的眞実に賢くなるためには、量的発想から質的発想にすべてを変化させることが最良の道というのがこの書の指摘である。例えば①物質的生産は地域単位で(食糧生産/ケア)②工業製品やエネルギーはより広範囲の地域単位で(自然エネルギーはローカルに)③情報の生産/消費はグローバルに④時間の消費はローカルに(コミュニティや自然等に関わる領域)という具合である。そして、「本来、科学や技術のあり方は決して“ひとつ”ではなく、それは自然観や生命観/人間観とともに、また実現されるべき“豊かさ”のビジョンとともに複数のものが存在する」とし、生物多様性のごとく生活多様性を提唱し、その下での QOL の追求を提示する。

ヨーロッパ社会の多くの都市ならびに北米社会の一部に車社会から脱却することにより、“本来の豊かさ”を取り戻そうという動きが急速に始まっている。LRT(Light Rail Transit)の活用などはまさにその一環としての動きではあるが、日本の江戸時代の人々は歩くことを人生の楽しみ的重要因素と考えていたことを忘れてはならない。先人の知恵はおおいに活用すべきであるし、例えばご近所の鎮守の森に行ってエコロジーを考えるのも一考ではないだろうか。(齊藤全彦)

